

〔男子女子前訓上〕口教

一朝おひになり候は、手水をおんつかひなされ候て、まづ神様を御拜みなさるべし、

〔孝義録二陸奥一〕忠義者半助

半助は、略中日ごとに朝とく起て水をあび、垢離とりて後につとめけり、

〔石田先生事蹟〕平生朝は未明に起きたまひて、手洗し、戸を開き家内掃除し、袴羽織を著し給ひ手洗し、あらたに燈をけんじ、先づ天照皇太神宮を拜し奉り、竈の神を拜し、故郷の氏神を拜し、大聖文宣王を拜し、彌陀釋迦佛を拜し、師を拜し、先祖父母等を拜し、それより食にむかひて、一々頂戴し、食し終りて口す、ぎしばらく休息し、講釋をはじめ給へり、

〔類聚名義抄五〕卧五貨反和具 フス

〔易林本節用集不言辭〕臥臥

〔日本書紀神代一〕書曰略中時伊弉册尊爲軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥シヨウ生土神埴山姫及水

神罔象女、

〔日本書紀神代二〕其矢落下、則中天稚彦之胸上、于時天稚彦新嘗チツセウ休臥之時也、

〔古今和歌集夏三〕寛平御時、きさいのみやの歌合のうた、 きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば、郭公鳴一こゑにあくるしの、め

〔枕草子二〕にくきもの

ねぶたしとおもひてふしたるに、蚊のほそこゑに名のりて、かほのもとにとびありくはかせさへ、みのほどにあるこそいとにくけれ、

〔太平記二〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

阿新略、中或夜雨風烈シク吹テ、番スル郎等共モ、皆遠侍ニ臥タリケレバ、下